A.E.マクグラス著　『科学と宗教』
稲垣久和・倉沢正則・小林高徳訳

芦名定道

宗教などというものは時代遅れの過去の遺物、非科学的な迷信にすぎない。といった議論が今なお幅をきかせている日本において、「科学と宗教」というテーマは、キリスト教の研究者のみならず、多くの信仰者にとって、もっとも気になる問題の一つではないだろうか。これは、専門家好み特殊な研究テーマであるにとどまらず、宗教に関わる者すべてにとって重大な意味を持っている。しかし、その重要性にもかかわらず、この問題を正面から扱える論者は決して多くはなく、その点で本書の出版は実に画期的なことであると言わねばならない。著者マクグラスは、「科学と宗教」というテーマを論じるのに現在もっともふさわしい人物の一人である。というのも、彼は古代から現代に至るキリスト教思想の研究をリードする第一人者であり、また専門的で錯綜した問題を明解に論じる能力において定評のある著述家であるばかりでなく、分子生物物理学から神学へ進んだ後も、常に「科学と宗教」というテーマに関心を持ち続けてきた研究者だからである。本書はマクグラスのライフワークと言うべき「科学と宗教」をめぐる研究プログラムの全体像を示すものであり、キリスト教思想の最前線で今いかなる議論が展開されつつあるかを知る上で、最良の入門書である。本書では、明確な問題設定と具体的事例を駆使した説得力あふれる論述が展開されているだけでなく、冒頭に「本書の使い方」が示され、議論のポイントの要約が随所で行われている。しかも、各章末には「より深く知りたい人のために」として参考文献が挙げられるなど、入門書としての多くの工夫が見られる。

さて本書の内容であるが、まず「科学と宗教」という問題に関わる歴史的トピックス（ガリレオ、ニュートン、ダーウィンらをめぐる出来事）と現代キリスト教思想における主要な立場（自由主義、近代主義、新正統主義、福音主義など）が概観される（第一章、第二章）。読者は、これによって「科学と宗教」がいかなる問題であり、どんな意味を持っているのかを知ることができる。次に、「科学と宗教」というテーマを論じるための理論的な基礎が提示される（第三章、第四章）。主に扱われるのは、現代の科学哲学（デュエム＝クワイン・テーゼ、ポパーとクーンなど）と神の存在論証であるが、こうした哲学的な議論は、「科学と宗教」の関係を論じる上での不可欠の基礎に他ならない。以上の歴史的また哲学的な考察を受けて、本書の後半では、いよいよ「科学と宗教」をめぐる主要な論点へと議論が進められる。取りあげられるのは、「創造と科学」（第五章）、「自然神学－自然の中に神を発見すること」（第六章）、「科学と宗教におけるモデルと類比」（第七章）であるが、いずれにおいてもマクグラスの博識と明解な論述は実に印象的である。そして本書は、「科学と宗教の諸問題」（物理学、生物学、心理学について。第八章）、「科学と宗教の事例研究」（代表的な神学者の紹介。第九章）で締めくくられるが、バーバー、パネンベルク、トーランスら代表的な神学者の思想紹介は、「科学と宗教」という問題を多面的に理解する助けとなるであろう。

『科学と宗教』の入門書としてのすぐれた特徴は以上の通りであるが、最後に強調しておきたいことは、本書が、単なる入門レベルを超えた専門家も確認すべき議論を含んでいる点である。たとえば、自然科学の理解と発展に対するカルヴァンの貢献、進化論をめぐ

るウィルバーフォースとハックスレーとの論争の真相などは、専門の科学史研究者もしばしば誤解している事柄であり、「科学と宗教の対立」といった俗説に足下をすくわれないためにも、ぜひ知っておきたい問題である。さらに、本書が、フェミニスト神学、エコロジーの神学といった現代キリスト教思想の動向を的確に捉え、その中に「科学と宗教」という問題を位置づけている点も、特筆に値するであろう。

「科学と宗教」というテーマに取り組んでいる研究者の一人として、本書が日本における「科学と宗教」をめぐる本格的な議論と研究の基盤となることを期待したい。

（あしな・さだみち＝京都大学文学部助教授）
（Ａ５・一二七頁・定価[本体 2500 円＋税]・教文館）

本文：28 字× 60 行